
《短編》 IS 〈インフィニット・ストラトス〉 —取り戻すために—

出川 戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《短編》 ISへインフィニット・ストラトス ― 取り戻すために ―

【Nコード】

N4742Y

【作者名】

出川 戦

【あらすじ】

―― 10年前、全世界に衝撃が走った。

世界中の戦略型弾道ミサイルが、何者かによって軍事コンピュータがハッキングされ、日本を照準に発射された。

人々は生き残る事を諦めた。だがそんな彼らの目の前に、1人の救世主が現れた。

その女性によって日本はミサイルの被害から免れ、その女性の纏っていたマルチフォーム・スーツ、ISを相手に、『世界』は闘いを

挑み、そして敗れ、無条件にそれを受け入れた。

しかし、そのISには致命的欠陥があった。

それは、『女性にしか扱えない』という事だ。

世界中がISを実戦配備していく中、世の中には徐々に女性優遇処置が施され、どこで道を誤ったか、世界は『女尊男卑』の社会になっ
てしまった。

多くの男は、今はもうその現実を受け入れて生きている。

そんな中、そんな社会に不満を持つ男がいた・・・・。

—————その男の名は、織斑一夏—————。

（前書き）

アリアが不調なので、気分転換に書いてみました。

この小説は、作者が以前友達とISについて話していた時に「IS
ってもっと女尊男卑の設定を押しの方が良かったんじゃないか？」
という話題に至り、最終的には「原作者（弓弦イズル先生）の執筆
が遅いのは、一夏の設定が曖昧だからだ」などというよくあるカン
ジに陥り、「だったら書いてみよう」と思ったので書きました。

この小説内での一夏の設定は、『女尊男卑の世の中に不満を持って
いる』『その女尊男卑の制度を作る元凶となったISがキライ』『
だがIS世界大会優勝者であるのが姉の千冬なので複雑な心境』『
女性がキライとかじゃなくて、男を道具のように扱う女性を疎まし
く思っている』『言いたい事は素直に言う』『IS学園には男の尊
厳及び人権回復のために入学』『最終目標は実姉の千冬を斃すこと
とモンド・グロッソでの優勝』『その他原作と一緒に』という具合で
す。

他作でもいろいろ書かれたりしていますが、この二次小説は完全に
原作一夏の設定をいじっただけのモノです。過負荷でもなければ亡
国機業でも、ましてや転生者や憑依した人でもありません。さらに
言うところチートですらありません。その実力は完全に原作と同じです。

原作のストーリーをなぞっていくだけの退屈な話になるかもしれま
せんが、どうか一目見てやって下さい。m（　　）m

10年前。まだ幼かった俺は詳しくは知らないが、世界に戦略型弾道ミサイル2341発が何者かにハッキングされ、日本を照準に合わせて……発射された。

その事実、人々はただ諦めるしか出来なかった。

——だがそんな絶望の中、救世主が現れた。

その女性^{……}はたった1人で、飛来してきたミサイルの約半分……
・1221発を、叩き斬った。

4

そしてそれから少しして……『世界』はISに挑み、そして敗れた。

——『世界』は無条件に、ISを受け入れた。

ただし、ISには致命的な欠陥があった。

——『それは、女性にしか動かせない』という事だった。

だが、ISは現代兵器を全て鉄屑のようにあしらってしまう、最強の兵器だ。故に、欠陥があらうともそれを欠陥としなかった。

『女性にしか動かせないのなら、女性に動かしてもらえばいい』
そのような考えが、一般的とされた。そして世界は女性優遇社会へとなり、どこで道を踏み外したのか、いつの日か『女尊男卑』の世の中へと変わってしまった。

だが男性ではISを動かせない。ISに勝てるのはISだけなのだ。

世界の男は諦め、受け入れざるを得なくなった……。

——でも俺は、それを正しいとは思わない。

過去にあった『男尊女卑』の風潮を、日本人は打ち崩した。だった

ら、『女尊男卑』だって同じはずだ。人類みな平等。天は人の上に人を創らず、だ。

その精神で今まで生きてきたが……世界は何も変わらなかった。

そんなある日、俺にとって人生の転機となる日がやって来た。

――俺は、女性にしか動かせないはずのISを、起動させたのだ。

俺はその時、神に感謝した。

別に俺はクリシタンじゃない。無宗教だし、神様なんて偶像に縋った事なんて無い。

でも、感謝するくらいならいいだろう？ なあ、神様……。

「これで俺は、この腐った世の中を変えてみせる――
――！！」

そんな俺の名は・・・・・・・・織斑一夏―――。

IS学園・・・・・・・・。

ISによって世界を混乱させた責任として主に米国の圧力から設立させられた、世界各国のIS操縦者を育成する機関である。
そこに俺は入学した。政府からの命令で。

何でも、人類初だから保護観察対象にしたいらしい。俺はモルモツトか！

だがそんな一般人の意見は、政府の圧力によって押し潰され、こうしてめでたく強制入学が決まりましたとき。めでたしめでたし。

「めでたくねえよ!!」

「ひゃう!!?ど、どうしました?織斑君」

さっき自己紹介をしていた俺のクラスの副担任、山田麻耶先生が、小動物みたいにびくびくしながらそのずり落ちた大きすぎる眼鏡の向こう側で上目使いをしながら俺の方を見ていた。

気付けば、クラスの皆から強烈な視線ビームが浴びせられ、俺は今すぐ胃に穴が開きそうになっていた。ああ。座席の位置も悪かったな。一番真ん中の最前列ってなんだよ。

「あ・・・す、すみません。何でもないです・・・」

俺は山田先生にペコペコ謝りながら、なんとかこの場を凌ごうとする。

「え、ええと・・・ついでに、自己紹介の方も済ませちゃってくると、助かるんですけど・・・」

なっ!?!もう俺の番が来てたのか。緊張しすぎて気付かなかったぜ。

俺はがたっと椅子から立ち上がり、後ろを振り返った

「ええと・・・織斑一夏です。よろしくお願いします・・・」

『・・・』

・・・あれ?続きなんて言うつもりだったわけ。・・・えーと・・・やべえ!ど忘れしちゃった!

さっき一人でバカやった直後だから、余計に注目を浴びてるし・・・

・・・。

どうする・・・？どうするんだ、俺よ！？

・・・ピーン————！俺の脳裏に某小さくなった名探偵のアレミ
たいなカンジで妙案が思い浮かぶ。

「・・・————以上です！！」

ドタァァァン！！

俺以外のクラス全員がずっこけた。

「・・・え！？ダメでした！？」

「ダメに決まっているだろう！このバカ者！！」

バカァァン！俺の脳天に、凄まじい衝撃が襲った。

・・・っていうか、この威力、この角度、そして速度・・・
まさか、この俺の頭を突然背後から強襲したキチガイは・・・
・・・！

「まさか・・・関羽————！！？」

「誰が三国志の英雄か、バカ者！」

バカアアアン！本日二度目のげんこつは、一撃目よりも遥かに強力だった。

「・・・ち、千冬姉エ・・・」

「どうした？もっとげんこつが欲しいのか？ならば望みどおり、何発でもやるぞ」

「いえ。結構です」

俺は即答で断った。これ以上殴られたら鼻から脳みそが出てきちゃう。

『キヤアアアアア！！』

ビリビリと空気が震えるかと思うほどの絶叫が、クラス中に響いた。

まあその理由は大方、元世界最強のブリュンヒルデこと俺の実姉、織斑千冬の登場によるところか。

「はぁ・・・どうして毎年私のクラスにはバカしか集まらないのだ？」

ちなみに実弟である俺の口から言わせてもらおう。この千冬姉。こういう女子高生的なノリが大嫌いである。そういうフリをしているとよく言われるが、それは大きな間違いだ。

「それで？お前は挨拶もまともに出来んのか？」
つく、忘れてなかったか。

「いや・・・千冬姉、こんなし・・・」

視線を浴びてたら・・・と続けようとした俺の顔面は、千冬姉の圧倒的な力によって机に押し付けられた。

「学校では織斑先生だ」

「はい・・・織斑先生・・・」

こうして善良な一般市民は、目の前の強大な（物理的な）力によって（文字通り）抑えつけられるわけか。

世の中の不条理を再認識した俺は、ただただ目の前に職業不定だった姉が実は教師してましたという衝撃の事実に驚いて、後の人の自己紹介なんて聞いてもいなかった。

その次の休み時間。

「—————ちよつといいか？」

めっちゃくちゃ長いポニーテールを垂らした女子が、机に突っ伏す俺に話しかけてきた。

「………箒か」

「そうだ。話がある。屋上でいいか？」

「ああ」

この女子……名を篠ノ之箒という。6年前まで俺は剣道をして
いたのだが、箒はその時の同門の女子なのだ。
ちなみに彼女、俺が嫌いなISを開発した篠ノ之束の実妹でもある。
ちなみに俺は束さんの事を嫌ってはいない。天災と比喻されるあの
人自信も、この世界が女尊男卑の風潮になってしまうなんて思いも
しなかったらしいし、興味も無いらしいからな。

それから箒と6年ぶりに話をして、予鈴が鳴ったので教室に戻った。

だが、事件はその後の休み時間に起こった。

「—————ちょっとよろしくて？」

「ほえ？」

さっきの授業が全く解らなかった俺は、再度机に突っ伏していたの
だが、そこに不意を突くような形で声を掛けられたので変な返答を
してしまった。

「まあ！なんですよ、そのお返事は！？わたくしが声を………」

「あー、なるほど。………
そういうタイプの女子^{ヤッ}か。」

「悪いけど、俺はアンタとは話したくないんだ。とっととどっかに

行ってくれ」

「な………!!? なんですよ、その言い方は!!!」

「……俺は、こういういかにも今の時代の女子っていうのが、殺したくなるほどに嫌いだ。」

昔、小学生の頃だったか………ISが出てきた後に、俺は何の因果か1万円の人こと福沢諭吉の『学問のすすめ』の一節を目にした事がある。そこには、『天は人の上に人を創らず』とあった。俺は、その言葉に衝撃を受けた。この人は本当に凄い人だと幼いながらに感じた。

だが現実には、男性は女性より権力が無く、尊厳も人権も無い。この人の言っている事は、ただの理想でしかないとも思った。

「……………」だから俺は、そんな本当の意味での男女平等の世界を創り出したいと思った。

それから俺は、女性にパシリを頼まれようとも何をされようとも、毅然とした態度で自分の意見を述べた。そうする事で理解してくれる女性もいたが、警察のお世話にさせられた事の方が多い。

中学の友達にも、『程々にしておかないと、その内取り返しのない事になるぞ』と何度も忠告された。でも、これだけは曲げられないんだ。俺には。

「……このわたくし、セシリア・オルコットを侮辱するおつもりですか!?!?」

ああ。まだいたのかお前。セシリアだっけ? ヒマなヤツだな。

・・・と、ここで次の授業の開始を告げる予鈴が鳴ったので、セシリアは捨て台詞を吐いて自分の席へと戻っていった。その捨て台詞をはじめ、俺はセシリアの放った言葉のほとんどを聞いてなどいない。スルースキル発動だ。

「・・・ああ。そう言えば月末のクラス代表戦リーグマッチに参加する代表を決めなければならんだったな。誰か立候補はいないか？自薦他薦は問わんぞ」

千冬姉「・・・じゃなかった、織斑先生がそう言っても、誰も手を挙げる者は・・・」

「はい！織斑君を推薦します！」

「・・・なん・・・だと・・・？」

「他に意見は無いか？では、代表は織斑という事に・・・」
織斑先生が仕切ろうとしたので、異議申し立てをしようと立ち上がろうとした瞬間・・・

「待って下さい！納得がいきませんわ！」

「・・・うわあ。セシリアだよ。」

「大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！こんな極東のサルになど、代表が務まるハズがありません！ここは実力トップ間違いないのイギリス代表候補生、このわたくしが・・・」
「プツンツと、俺の中で何かが切れた。」

「—————おい。テメエ、誰がサルだって？ああ！？」

ボタンツとさっきまで座っていた椅子を叩き付けるように倒し、セ

シリアにドスの効かせた声で睨む。

「っな！なんですか、突然……！！？」

「なんですかはこっちのセリフだ！人のこと散々下に見やがって！
粹がるのも大概にしろよ、ライム女！！」

イギリス人の蔑称を吐き捨て、俺はセシリアの席に近寄っていく。

「一夏！」

「箒は黙ってろ！このままコケにされて黙ってられるか！」

箒はビクツと肩を竦ませ、大人しく席に座った。……ごめんな。
でも、これだけは譲れないんだ。どうしても。

「————！！！！言ってはならない事を言いましたわね！良いで
すわ！そこまで言うのなら正々堂々と決闘ですわ！」
セシリアはどこからともなく取り出した手袋を、俺に投げ付けてき
た。

「上等だ！その決闘、俺が買ってやる！」

俺はさっきの手袋を縦に引き裂いた。

「……話は纏まったな。では、決闘は来週の月曜。その放課後
に第3アリーナで行う」

織斑先生が纏め上げ、俺とセシリアはそれに頷く。

「負けて吠え面を掻いても知りませんわよ！」

「お前こそ、今すぐ本国に帰る用意でもしておくんだな！！」
舞台は整った。だから、後は見せてやるだけだ！この学園中のヤツ

らに、俺の……男の威厳ってヤツを！

その日の昼休み。食堂にて。

「箒、頼む！ I S について教えてくれ！」

「下らない挑発に乗るからだ」

俺は、I S が嫌いだったのでその知識も人並み以下だ。千冬姉がなぜか俺を I S から遠ざけていたのもある。おかげでこっちは知識も何にも無い。だから束さんの妹である箒に教えてもらおうと頼み込んでいるのだが、中々首を縦に振ってくれない。

「箒はあんなヤツに大きな顔させておいて良いのかよ!？」

「そ、それは私だって……」

「俺は嫌だ！世界中の人間は等しく平等のハズだ！なのに人種や性別で人の事を差別するセシリアに、俺は負けるワケにはいかないんだよ!!!」

箒は箸を置き、少しの間目を瞑った。

「……わかった。では放課後、剣道場に来い」

「おう！サンキューな箒！頼りにしてるぜ！」

なんで剣道場なのかは分からないけど。

でもま、箒も何だか嬉しそうだし、それでいいか！

ちなみに……箒は剣道の稽古しかしてくれなかった上に、寮の部屋までなんでも知らんが一緒だったため、俺は1日中箒と過ごす事になってしまった。

決闘当日。

「箒。お前、俺にISについて教えてくれるって言ったよな」
箒は俺とは反対方向を向いてしまった。

「目を逸らすな！」

「…………仕方ないだろう！お前のISは、まだ来てすらいない

んだぞ!？」

箒の言う通りだ。俺のISは、まだ来ていない。

俺は世界各国の要望から、そのデータを取るために専用機が支給される事になった。だがその専用機とやらは、何かあったのか到着が遅れに遅れているのだ。

そんな中、山田先生がすげー遅いスピードでパタパタ走って来た。

「織斑君！来ました！織斑君の、専用機が————！！！」

「本当ですか！！？」

「織斑、さっさと準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られている」

あ、千冬姉。いたんだ。

「これが織斑君の専用IS……『白式』です——！！」
シャッターが開けられ、その奥には真っ白な西洋の鎧のようなISがあった。

俺はそれに触れてみるが、なんとなく初めて触れた時と感触と言うか、感覚が違った。

「織斑、背中を預けるように……そうだ。後はシステムが最適化してくれる」

俺は千冬姉の言う通りに、白式を装着する。……よし。ちゃんと起動した。

「・・・・・・・・箒」

「なんだ？」

「————行ってくる」

「・・・・・・・・ああ！」

箒をはじめ、千冬姉や山田先生に見送られ、俺はセシリアが待ち構えるアリーナに飛び出した。

「よく逃げずに来ましたわね」

「お前こそ。わざわざ負けに来るなんていい度胸してんな」

「・・・・・・・・手加減してさしあげようと思いましたが、やはり全力で叩きのめしてあげますわ！」

ビ————！！！！試合開始のブザーが鳴り響いた。

バシユウウウ！！

セシリアは開始直後に、俺の左肩を大型のライフルで撃ち抜いてきた。

さっきは・・・・・・・・ビーム兵器か！

「さあ、踊りなさい！わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞

曲《ワルツ》で!!」

セシリアは言いながら、俺に向けてライフルを乱射してくる。

「1人で勝手に踊ってろ、ボケがアアア!!!」

俺はビームの弾幕を掻い潜りながら、何か使える装備が無いか武器一覧を開いて確認する。

『近接ブレード 名称未設定』

「なんで1つしかないんだよオオオオオ!!!」

俺は思わず叫んだが、無いよりはマシだ。近接ブレードを呼び出し、ソレを片手にセシリアに突っ込んでいく。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうなんて・・・
・・1000年早いですわ!!」

セシリアの背中の非固定部位から、小さなフィンアンロックユニットのようなビットが4つ、飛び出した。

「さあ、ここからが本当の円舞曲でしてよ!」

そのフィン状の物体から、さっきのと同じようにレーザーが放たれた。

「————うおッ!!?」

俺は間一髪回避に間に合ったが、4つのビットに囲まれてしまい、集中砲火を浴びている。

「この自立起動兵器・・・ブルー・ティアーズの前に、跪きなさい！」

「ごちゃごちゃうるせえんだよ、お前はアアア!!!」

ビット4機による包囲網を強引に突破し、俺はセシリアに肉薄した―――!

「27分・・・このブルー・ティアーズを相手に、初見でここまです耐えたのはあなたが初めてですわ」

「・・・・・・・・はあ・・・・はあ・・・・るっせんだよ、クソが・・・・・・・・！」

強がりを言っているが、今の白式のシールドエネルギーは100を切った。あと1、2撃決まれば負けてしまうだろう。

・・・・・・・・だが、もうあのビットは見切った。後は近づいて斬り伏せれば、あのでかすぎるライフルでは対応できない。

「では・・・・・・・・そろそろ閉幕と参りましよう!」

セシリアのビット4機が、俺に牙を向ける―――!!

「だから、1人で勝手にやってやがれエエ!!!!」

俺は自分の背後に向けて、回転しながらビットに斬撃を与える。そのビットは真っ二つになり、地面に落ちていった

「そんな・・・!?」

「コイツはお前が毎回命令を送らないと動かない!そして、お前は無意識に俺の反応が一番遠くなる場所にビットを置いて射撃するクセがある!つまり!」

再度、俺は回転斬りでビットを切り捨てる。

「——————攻撃を誘導できる!」

「—————!?・・・だったら!」

俺は今度は袈裟斬りで右のビットを破壊し、そのまま左のビットも斬る。

「分かりやすいんだよ!お前の性格は!だから簡単にビットの位置を先読みされる!」

チャンスは今しかない!俺は最大加速でセシリアに突撃した!

「——————かかりましたわ!」

セシリアの腰のアーマーが外れ、中から何かが出てきた。

「ブルー・ティアーズは、6機ありましてよ!」

そこから放たれたのは、ビットではなく――

――ミサイルだった。

ドカアアアアアアン!!!!!!

俺はソレを、直撃してしまった。

――迂闊だった。もっとなにかあると考えるべきだった。
こんなんじゃ、負けて当然か……………。

……………あれ？なんでまだ試合終了のブザーが鳴って
ないんだ？

『フォーマツト フィットティング
初期化と最適化が完了しました』

・・・？なんだ、このアイコンは。

「・・・まさか、ファースト・シフト一次移行！？あなた！今まで初期設定の機体で戦っていたっていうの！？」

セシリアが何か言っているが、俺にはそんな事はどうでもよかった。

「・・・まだ、勝機はある————！！」

俺は、武器の名称が変わっているのに気付いた。その武器の名は・・・

「雪片・・・式型・・・？」

『雪片』とは、千冬姉がモンド・グロッソで優勝した時に使っていた武器の名前だ。

「・・・俺は、最高の姉さんを持ったな。コレさえあれば、俺だって・・・『世界最強』になれるかもしれないんだからな

——————！！！！」

「は・・・？あなた、何を言って・・・」

「この刀を以って、俺は証明する！そして思い知らせる、世界に！何が正しくて、何が間違っているのかを！そして世界最強になった時、俺は宣言する！これが今までお前達が奴隷のように扱ってきた男の本当の強さだと！！！！」

俺の叫びに応えるように、雪片式型の刀身が変形し、エネルギー刃が展開された。

「セシリア！お前は俺を、日本人を、男を馬鹿にした！！その偏見を今！ここで！叩き斬ってやる！！！！」

ズアッ、と今までのソレとは段違いの加速で、俺はセシリアに肉薄する。

「—————!! 斬れるものなら、斬ってごらんさい!!!」
セシリアはミサイルを4発撃ってくるが、今の視界がクリアになった俺には、止まってすら見える。

ジャキイイイイイイン!!!!

4発のミサイルが、真っ二つに斬り落とされた。

「—————そんな!?!」

「これで、終いだアアアア!!!!!!」

セシリアに向けて下段斬りを食らわせようとした、まさにその時。

ビ—————!

『試合終了。勝者—————セシリア・オルコット』

試合終了のブザーと、セシリアの勝利を告げるアナウンスが鳴り響いた。

「なんで俺は負けたんだ？」

「バリア無効か攻撃を使ったからだ」

ピットに戻った俺は、織斑先生からのありがたい補修を受けていた。

「雪片式型の特殊能力であり、白式の単一使用能力でもある『零落

ワンオフ・アビリティ

白夜』の能力は、自身のシールドエネルギーを攻撃時のエネルギーに変換し、相手のバリアーを無効化して、本体に直接ダメージを与えることで絶対防御を強制発動させることができる。

お前はソレを無意識のうちにやったのだろう。エネルギー残量が無くなったら負けのISの試合で、この能力は両刃の剣だからな」と分かりやすい説明を頂き、俺と箒は並んで寮に帰った。

「……………次こそはセシリアに勝つ！と意気込んで……………」

「ではクラス代表は織斑一夏で決定だな」

「はい、先生！なんで負けた俺が代表なんですか？」

俺は元氣よく挙手して質問した。

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

誰もお前になんぞ質問してないよ。

「考えてみれば私が勝つのは当然のこと。それで、わたくしも大人げなく起こった事を反省して……『一夏さん』にクラス代表を譲ることにしましたの」

……一夏『さん』って……どういう風の吹きまわしだ？

「わたくしのように美しく優雅で優秀な指導者がいれば、一夏の成長も著しく伸びること間違い無し————！」

セシリアがそこまで言った時、箒がガタッと大きな音を立てて立ち上がった。

「あいにくだが、一夏の教官は私だ。私が、『直接』頼まれたのだ！」

なんか知らんが直接をやたらと強調してたぞ。

「あらあら。I SランクCの篠ノ之さんが何の用です？ わたくしは今、一夏さんとお話をしていたのですわよ」

「うるさい猫かぶりめ！ お前など最初からお呼びでないというのにまだ解らんか！」

「鬼の皮を被っているよりはマシですわ！」

あーあ……ケンカ始めちゃったよ。

でもま、いいか。これで1人、男に対する偏見を持ってる女が消えた事だし。

——そして、いつかはそんな偏見があつたなんて信じられないような……そんなセカイにしていきたいな。

TO BE CONTINUED……?

(後書き)

いかがだったでしょうか？大してヤマもオチも無いとは思いますが、感想などをくれるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4742y/>

《短編》 IS〈インフィニット・ストラトス〉 一取り戻すために一

2011年11月17日18時13分発行